

巻 頭 言

～洞爺湖サミット雑感～

病 院 長
近 藤 哲 夫

本年7月に3日間洞爺湖サミットが開催された。当院からさほど遠くないところなので開催地が決定したときから医療面での関わりがどのようになるか気になっていたが、幸い大きな事件、事故も発生せず当院にも影響がなく終わったので安堵したことをつい先日のように記憶している。

思い起こすと、サミット会場から近隣の総合病院の1つが当院であるため、緊急時には何らかの協力、支援を提供することになるであろうと考えていたし、事実北海道庁からも事前に病院視察があった。そのときの質問のなかに病棟のワンフロアを全部サミットのために提供できるかという内容もあったが、その時点で不可能である旨を返答した。一方、本年2月に当院に対し災害拠点病院になる意思を問う文書が来たのでそれについては慌ただしく申請し、すんなりと許可を得た経過があるが、これはサミットに向けての国の方針であった。

サミット開催数ヶ月前には近隣の留寿都村に威風堂々とした国際メディアセンターの全容が現れた（しかしこの建物はサミット終了後すみやかに解体された）。またその前から会場周辺の道路の改修工事が頻繁に行われていた（こんな所まで……と思う道路もあった）。電柱の上での作業も目に付くようになった。おそらく警備のための作業であろう。沿道の草刈も隅々に至るまで徹底して行われていた。逆に道路付近の無人の家、廃屋様の建造物の目隠しとして植栽の鉢（大きなものは高さ数メートルの植木）がこれでもかと思うほど密に並べられていた。ずいぶんときれいな道路と景観になったと感心しながら幾度かマイカーを運転していた。

開催2ヶ月前頃になると夥しい数の警察官と警察関係の車輛が道路沿いに、交差点付近に、あるいはちょっとした空き地に待機している光景が、運転中に目に入るようになった。全国から派遣されてきた警察官には炎天下での監視は、北海道の夏とはいえかなり厳しいことであり体調管理に大変であったのではとお察しする。

開催1ヶ月前頃からは道路沿いで監視する警察官は50～100メートル間隔で数キロメートルに亘って配置され、所々で検問が行われるようになったためそれを避けるために会場からかなり離れた道路を迂回して運転したがやはり同じ光景であった。このような緻密でかつ大量の警察官の動員による警備が功を奏して何事も起こらなかったことは大変喜ばしいことであった。これで一件落着として終わるのが普通なのだが……、どうも腑に落ちない。いったいこれらに費やされた費用はどのくらいなのだろうか。前置きが長くなったがここからが本題である。今、医療が崩壊してきている現実を考えてみよう。国は、お金がない→よって社会保障費も厳しく削減しなければならない→その結果として医療費抑制策は当然のことである。この三段論法的理屈は本当に是か？政策のひずみが却って医療崩壊を促すことになってはいまいか。

サミットの重要性、その効果も十分理解しているつもりであるが、今まで述べたようにあれほどまでしなくても良かったのでは……と、サミットの終わった後からしみじみ思うことがある。国は莫大な費用をかけて内外の要人を護ることに成功したことは素晴らしいことであるが、それと同じように一般国民の健康を守ることに必死になって成功させて欲しいと。

(平成 20 年 12 月)

原著・症例報告